



門へ 13
部 2016
巻

大通俗一騎夜行巻之五

志水葵十述

佛と理世乃樂と悟す

叔との語より一正の大橋座席よりありて脱くと
吾乃論とゆく小笠原のみな人として送る為なり
これこそその言はばさる月お交と門はうらりあり
これこそお内宿とはよくまゝ又つて世をわて歩あり
し今を救ふこれ早にお移つて佛とてと云ふ一
笑ひもあはれ世俗佛と小僧んとする家に
松崎と扱ひわけてあつてもあつても中々
あると云ふの橋の利はうはあなまの人の口入とは



河津



束之高閣にありんらん山雲と居て
 穠人の浮目と助子と圓一からん先家くが
 まあるより人百弟事南家迄一運任立河のせ
 いたる黒白の雨と歯と帯れそかこ
 後月の輪の有る態の如くそち
 之より神の呉服も裾止の切と横は
 之に信と教ゆ毎日と之新中
 書きの女医者者の者板有
 世小のゆ福ごとやそて人くの
 ありと弟家れ代の戸あり魚一
 宝玉の以は宝房

かく梅の社舞二又又の
 海には信と梅立の娘と
 止られれと年減令と
 書付を納の燈灯乃名
 くしとまて是所謂世の
 い斗りあの中一
 う成ると業送あし
 捌さうちつと喜が
 厚凡の二枚おと混
 智とらとあよとひ

生きたる云々斗りよ、宙の花よりちと、播好の太
紙、文輝花廓、おと、鳥石風と、志、心、こ、ま、あ
書ひて、法、付、心、面、の、座、は、回、よ、華、花、は、ま、ま、海、景、の
一、の、と、是、ち、ら、あ、も、法、付、ま、ど、外、より、法、心、寂、し、生、ま
や、水、澄、ま、ま、一、座、の、先、生、と、ん、ん、お、お、う、是
皆、花、の、ま、ま、よ、河、く、ど、念、お、の、ま、ま、古、代、ま、お、い
う、く、く、す、意、お、よ、ま、お、隠、ひ、あ、く、生、た、る、あ、ま、投、入、と
唯、今、い、世、花、紙、蘭、浮、檀、金、ま、の、り、也、納、紙、の、ま、ハ
赤、梅、檀、の、香、本、お、と、羅、漢、を、ま、ま、あ、ま、合、て、檀、系、で
花、の、ま、ま、と、す、る、や、う、に、大、お、あ、ま、意、お、く、是、花、ハ

表、向、一、座、り、よ、そ、も、お、た、ま、と、人、よ、り、今、世、お、ひ、た、る、り
記、白、ま、の、あ、ま、に、公、意、の、お、お、花、と、生、ま、ま、花、香、を
あ、ま、酒、苦、味、と、号、と、ま、花、の、脚、函、と、あ、る
俗、く、と、以、て、茶、と、盛、る、お、ま、石、と、並、く、教、養、の
石、壇、ま、ま、向、お、ま、よ、と、樂、し、む、是、お、の、人、上、ハ、
斗、り、の、付、く、機、又、で、ん、ま、皆、え、ん、あ、れ、お、花、と
生、ん、り、い、ん、の、花、の、ま、ま、お、ま、と、あ、ま、と、あ、ま、と、あ、ま、
そ、外、よ、商人、も、い、ん、世、の、椽、鼻、で、お、茶、と、し、り、
美、石、と、お、或、と、瀟、湘、軍、談、之、國、志、の、お、ま、と、あ、ま、
小、お、り、か、く、く、優、ん、と、居、る、お、中、心、下、志

一考 長行 上 五

カ

商人の世はありきものありやわたりてんく乃人用
 いせしめあの手もいせしめと能くするもいせしめ
 やるむむいせしめと能くするもいせしめ
 負けくせあて奴が受けるやうに仕つけく月利
 自勝かあてて似せ政宗の胡之清の来るもの
 と仲まよあてくさちくさちくせくせくと云後
 皆七月と云ものを信向してあてくやる
 櫛は冠とかあてた馬帽あてとせくと云後
 ぬいんと云天運流還とあてりてを利ある
 ぬいんとするやとくられ一服下の下あてり

さては籠も大船神の運の神と名付てむせくと相
 夜音とあてくもてり運の神さう法とあな
 そのさう海りしち皆胴取の方むまこととせしめ
 定まてうけりことやとせしめ漸く草れ取と
 井と痛くして泊り下てむせくと云後と云く
 船店送りと運ぶ船は夜合と云ふ母小の人
 海軍の市と大船と盗むとは合が能くといふ事
 少くあてくもいせしめ何者清中と云ひてある
 と能くして中前ち和後と云ふとやてよあてくし
 子掛と船冠りの船ははくはよ合と云ふ事と云後

蘇八が突つからぬ根を根ては命頂に比る
 と云ふは同きよ新丸の心と懐きと
 障子と細目よはくせやせと母の乳を
 娘よを程りたまはとと揺るに
 世に只しと名付くと世帯に法後を
 等が毎夜歩りくと海に海で寺の建
 仏の心代より人の心代とが
 双浄二からくまをまて器お分
 中を破るとあんなにわ
 をを角帯ひの雨さ、晴
 かに此の
 かに此の

源入とせぬやうに話先考へて
 と本を思ひとてまてを話
 うに月とのぐれ舞はあふ村と
 せと魁と世を帝の所供は日
 ばらやう各人局とせれて、
 あく毛のこ本を多ひ留りよ
 あふまると云はく、
 庭うー丁やを
 極さんと和らるる
 皆人の本を語りよはけく

鬼小て盡尊君が返音算と鶴の舌をとて
と為滞と云者地獄へ落て鬼に山せし奴
あらんらんし捨て集よ平兼登がわごらんが系れ
悪徳と誣しと源重くが妹のしとさつたふ鬼に
後権とさあらんしとさく令冠母系紐とる平系と
云奴と所送のよはる所の流しと鬼の月平流
どはと目と吟ひ意とく己とが子と捨て人捨あて
世うと根目くえんと居る所の流ありと
と仲系の子がも来ぬ家くが親もま系を鬼
目とあつり山しとてふふ十の救と念せま今は

七八九のちるお店よ秀齋の文立おまは皆をあらけ
らまこ子憐の鬼事平小ち天雁を力てとやととら
我らあまよ洗滌と仕と又鬼とと数々もととく
かへゆ〜丸の形よは浮名と屋敷よ止メ古く
ありて石葛と極と結と何まき書判と着懸
仕く箸くくりみまと者之官鬼の文小とゆ人
来くすすとらふとめく原乞の文の平を月と
のかれとまよとあらんしすれを鬼と外福内と
照きの文うと結入れとあて前交ら〜漸
疵瘡祿の法施富とまら内とく斗りたとあ

一巻更行と云

まきで扱つて袂柳よ糸い返とあひて兼に福が
這入ると咄くとはく居り内へ出でんで一夜と
明と夜とくくぞ鬼を舟とふもたふふのここと
まふがそまが舟に扱られし鬼角人なるふ
扱の横道があらうと細く情もあ己は水磨の
まはれは故う藍波鬼と云鬼おて十歳以下れ
子供ととりはれ大裡よま陽の初子の月れ
まうりは居くもやまもまもま大君乃まあれ
以津大う鬼の住家なるんときくうくく人面
鬼心のつとむる返してくれ鬼よま才と罪をらすこと

なぐ扱乃のなれ柳よはあくと初ものん誠入道う
万八子とこれ咄とせの人乃春の笑ひは海あ
と云て二人の羞と云せせるおたがマアま
にもあやせうと云せまら表紙の百鬼夜りの本
れ申うく大蛇のなうでりヤア何のるもあう
は神ひ小女の癖よそのやうに可也とふは或女
あうと申良乃人オ御供とんるやうに寝して
斗りぬれぬものうと云せつとせ親に似
ふい鬼子でも鬼割りどい人オもえんを
うく一色り二人と寝うして並強向とお

一巻二行

神助

高瑞

多和毛

宇叔惣

權主

見江戸

社中

車沼



燕子子

池乃端
道子
神



水世んかきまき
梧のわねたたか
さつきまき
白をこまき
た

水世んかきまき
梧のわねたたか
さつきまき
白をこまき
た

一考
夜
二七
五

るはましまし〜と云ふ。又大勢のあついで云ふが
 悪ひと云ひキ立ても國橋くせんせおの書と書はと
 云へば娘むすめ鬼おには可と云ひをるは戸の花
 音京とけい斗とと云ふらんやとまゝは書めづ思と
 或人と起とすう起と思うサア〜と云ふ切戸の
 方て本屋のなと〜と書く〜或人うと〜
 軒いびとかせて後編へん乃遠編ちゆうへんと書と〜
 敬白けいぱく

後篇

大 通

間 違 論

五 冊 近 刻

化物けぶつは羅らおと書

名なのさ

燕十

安永九年

子の書

東都書林

雪花堂

